九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

日本人患者における滲出型加齢黄斑変性に対するラニビズマブ硝子体内投与の5年間治療成績

和田，伊織

https://hdl.handle.net/2324/4110399

出版情報：九州大学，2020，博士（医学），課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

KYUSHU UNIVERSITY

氏　　名：和田　伊織

論 文 名：Five-year treatment outcomes following intravitreal ranibizumab injections for neovascular age-related macular degeneration in Japanese patients

（日本人患者における滲出型加齢黄斑変性に対するラニビズマブ硝子体内投与の5年間治療成績）

区　　分：甲

論　文　内　容　の　要　旨

加齢黄斑変性は後天的視覚障害の上位であり，不可逆性の視力障害を引き起こす.病型は海外に多い萎縮型と本邦に多い滲出型に大別され，このうち進出型は，脈絡膜新生血管(CNV)の発生と血管透過性亢進に伴う滲出性変化を特徴とし，現在抗血管内皮増殖因子(VEGF)薬が治療の第一選択となっている．しかし最近の大規模臨床試験の結果より，抗 VEGF 薬の必要時(PRN)投与では，長期的には視力の維持が困難であることが示唆された．そこで本論文では，実臨床における治療成績を評価するため，抗 VEGF 薬であるラニビズマブを用いて，必要時投与による，九州大学病院眼科における5年間の長期治療成績を検討した．

対象は 2009 年 4 月から 2016 年 3 までに九州大学病院眼科を受診した 288 名 295 眼とし，初回導入期治療としてラニビズマブを 3 回(1 ヶ月毎, 3 ヶ月間)，その後は増悪時に追加(必要時投与)投与とした. 5 年間経過観察を行い，後ろ向きに検討した．

矯正視力に関しては，治療開始後 1 年までは治療前と比較して，有意な視力改善を認めた．しかし，その後は 3,4,5 年目と有意な視力低下の進行を認めた．一方，滲出性変化の指標となる中心窩網膜厚は，治療前から5年間で有意に改善した(366±125 μm, 268±134μm, $p<0.0001$). また，抗 VEGF 薬の治療過程で出現する黄斑萎縮は，網膜色素上皮細胞下に CNV が出現するタイプである，classic CNV の症例で有意に認めた($p=0.01$).

ラニビズマブは AMD 疾患でよく用いられる．しかしながら，実臨床における必要時投与では，長期的な視力維持が困難であるかもしれない．黄斑萎縮は, classic CNV でよく起こり得るかもしれない．良好な視力維持には，より早く，継続した投与が必要である．